

飛鳥地域の調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1. 石神遺跡第3次調査

飛鳥寺の北西に接する石神遺跡は、1902年に須弥山石・石人像が出土した遺跡として知られている。当調査部では1981年に石造物出土地点の再確認も含めて、第1次調査を開始して以来周辺の調査を継続しておこなってきた。今調査区は、第1次調査区に西接し、「漏刻」で有名な水落遺跡の東北に接した水田にあたり、石神・水落両遺跡の関連をとらえるうえでも絶好の調査地であった。

第1・2次調査では、複雑に曲折する石組溝、掘立柱建物、塀等7世紀中葉の遺構と、これらの遺構を埋め立て整地した後に造営した掘立柱建物、塀、石敷等7世紀後半の遺構との2時期の遺構を検出している。今回検出した主な遺構も同様の2時期に大別できる。とくに7世紀後半の遺構は、前2回の調査結果と同様、7世紀中葉の遺構を廃絶した後に、大規模な整地をして造営していることが確認され、遺跡の性格が一変したことが一層明らかになった。

7世紀中葉の遺構 塀・掘立柱建物・石敷等を検出した。調査区の中央には東西塀 S A 600 が19間分(約46m)ある。柱掘形は一辺約1.8m、深さ2m、柱痕跡径約0.35mの大規模なもので

ある。S A 600の基壇は柱を立てた後に版築で築かれている。柱心から南約1.9mの距離に化粧石を立て並べ、基壇南縁としている。発掘区東北には3間(7.8m)×2間(4.2m)の南北棟の総柱建物 S B 620 が建つ。発掘区東端には南北石組溝 S D 332 (幅約0.7m、深さ約0.6m)がある。S D 332は第1次調査区で検出した東西溝 S D 331の延長部で、S D 331の屈曲部の7m西で北に折れ、北流する。北半部は間層を挟んで底石が二重に敷かれ、一部の側石とともに改修をうけている。S D 332は S A 600・S B 620の造

営に次いで掘鑿され、S A 600の東から2間目を貫通する。S A 600の北側には上記の遺構以外に、石敷・礫敷が存在する。S X 700は人頭大の河原石を敷きつめた石敷で、発掘区西北部で東西13m、南北13mを確認した。周辺の自然地形に沿って西北方向へ傾斜しており、調査区外へ続いている。東端には南北方向に見切石S X 660を並べており、その東にはS X 600と上面を揃えた礫敷が広がる。S A 600の南側には、11間(30.6m)×2間(4.8m)の長大な掘立柱東西棟S B 530が建つ。この南側柱に接するようにして東西石組溝S D 333がある。S D 333はS B 530の雨落溝をもかねている。S D 333は自然地形とは逆に東流し、第1次調査区南隅で石組溝S D 330に合流する。今調査区ではS D 333の側石はすべて抜き取られ、底石だけが残存していた。S D 333の南には石敷S X 526が広がる。S B 530とS A 600の基壇の間には拳大の礫敷S X 555が広がり、S B 530の西妻付近から西は人頭大の石敷S X 550となる。S X 550は西南方の台地状緩斜面S X 551を覆っている。

7世紀後半の遺構 堀・掘立柱建物・方形石組遺構等を検出した。東西堀S A 560は7世紀中葉の堀S A 600の南1.2mに位置する。柱間は両者一致している。S A 560の基壇は、S A 600の基壇上にさらに約20cm版築をして築成されている。基壇南縁は柱心の約1m南にあり、河原石で化粧されている。柱掘形は一边約1m・深さ1mで、S A 600に比して規模は小さくなっている。S A 560は東へのびて、第1次調査区のS B 325の南側柱にとりつくものと考えられる。S A 560の南には5間(9.9m)×3間(4.0m)の北庇をもつ東西棟S B 520および、東庇をもつ南北棟S B 510が建つ。S B 510・520と第1次調査区で検出した南北棟建物S B 301の3棟は柱筋が揃っており、一連の造営による建物と考えられる。S B 520の西には、内法3m×3.2m、深さ0.6mの方形石組遺構S X 540が構築される。幅0.4m～0.9mの自然石を2～3段積んで側

石とし、底面には拳大の礫が敷かれる。側石の裏込めには黄色粘土が使用され、底面の礫石もこの粘土上に敷かれている。S X 540は貯水施設とも考えられるが、これに直接とりつく取水・排水施設はない。S A 560の北側では、この時期の遺構は確認されていない。

まとめ 今回の調査でとくに注目すべきものは、7世紀中葉・後半両時期の二条の東西塀 S A 600・560である。7世紀中葉の S A 600は東・西への延長部が未確認であり、その性格を確定できない。

しかし、西南に接する水落遺跡に

石神遺跡・水落遺跡主要遺構配置図

は同時期に造営された漏刻建物と付属建物が存在しており、長大な建物 S B 530もこれらの建物群と一連の施設と考えられるため、S A 600は水落遺跡の北側を画する施設である可能性が強い。また、第1次調査で検出した須弥山石の倒壊位置は S A 600の北側にあたり、S A 600の北側に広がる石敷・礫敷は、須弥山石・石人像を含めた饗宴の場に関連した施設に相当するものであろう。このように飛鳥寺の西の地域は、用途に応じていくつかの区画に分けられていたことが推定できる。

7世紀後半の S A 560は第1次調査区の S B 325にとりつき、さらに東にのびる S A 305へと続く。その総延長は80mに達し、さらに東西に延びているので、この塀は飛鳥盆地の中央を東西に横断していた可能性がきわめて強い。とすれば、S A 560は、この北方に存在する重要な施設の南を限る大垣にあたる施設と考えられる。この S A 560と飛鳥寺北面大垣との間隔は約10mである。この東西に長い空間地は、『日本書紀』の「壬申の乱」の記事にみえる「飛鳥寺北路」との関連も考えられる。

2. 飛鳥寺周辺の調査

石神遺跡南方の調査 石神遺跡の南約70mの地点で農小屋建設にともなう事前調査を実施した。幅1mの東西トレンチ2本のうち東トレンチでは、30cm大の河原石を平坦に敷きつめた石敷 S X 506を検出した。石敷の隙間は広く、平瓦片が混入していた。石敷面は、周辺の自然地形とは逆に東に向かって緩やかに下降し、東西6mの間での比高差は約10cmである。西トレンチは東トレンチと5.5mの間隔をおいて設定した。西トレンチでは石敷は認められず黄色粘質土の遺構面で土壌 S K 507を検出したのみである。黄色粘質土層の厚さは約60cmで、その上面は石

石神遺跡南方遺構図

敷面より約20cm高い。西トレンチと東トレンチとでは遺構の状況が異なるが、両トレンチ間の調査はできなかった。しかし、石敷面が自然地形に反して東方に下降する事実を考えあわせると、黄色粘質土が建物の基壇であり、石敷SX 506が基壇まわりの舗装であった可能性もある。

東トレンチで検出した石敷の東端と、飛鳥寺の西面大垣想定線との間隔は約20mである。飛鳥寺西方では、大垣の西約25mに南北溝がある。この溝は今調査区の南約40mまで北流していることがこれまでの調査で確認されている。西トレンチはその溝の北への延長線上にあたっているが、南北溝がこの地点までは延びていないことがあきらかとなった。また、飛鳥寺に西接する位置で検出した石敷遺構は、「西槻広場」とも関連し、近接する水落・石神両遺跡ともども、飛鳥寺西方の地の性格を考える上で重要な資料となろう。

飛鳥寺南方の調査 1956・57年の3次にわたる飛鳥寺の発掘調査で、南門の南方に幅2mの石敷の参道が約25mにわたって延びていることが確認され、石敷参道の南側には「石敷広場」と称された石敷遺構が参道を横切るように構築されていることがあきらかになった。参道は、石敷遺構と交差する地点から南が、石敷遺構より一段(約15cm)下がり、幅約3.7mの未舗装の参道として南へのびる。したがって、石敷遺構は未舗装の参道によって東西に分かたれている。この参道と石敷遺構との境いには、河原石を南北方向に並べて見切石としていた。石敷遺構は参道に対して、西で北へ7～8°振れており、この性格については種々の論議がなされてきた。

1982年には、石敷遺構を確認した地点から東約40mの位置で、石敷遺構の南を画すると考えられる施設を検出した。この調査の結果、石敷遺構は南北両端を縁石で区切る低い基壇状の石敷であり、その南にはさらに石組溝をとまうことがあきらかになった。また、その構築年代は石敷遺構の下層から出土した瓦によって、7世紀中頃以降であると考えられるようになった。

今回の調査は、参道の南延長線上における農小屋建設にとまうものである。南と北に2カ所のトレンチを設定した。検出した主な遺構は、石敷、石組溝、参道、土管を使用した暗渠等である。北トレンチの北部で検出した石敷SX 01は30cm大の河原石を敷きつめたもので、その南縁には一回り大きい河原石を南に面をそろえて立てて南縁石とする。縁石の南沿いには、一段(約20cm)下ったところに犬走状の石敷SX 661(幅約0.75m)が東西方向に設けられている。このSX 661にはSX 01に比して小ぶりの河原石が使用されている。この犬走状石敷の南には、幅約0.7m、深さ約0.2mの西流する石組み溝SD 662が構築されている。溝の南北両岸には0.5m大の河原石を立て並べて側石とし、溝底には河原石を敷きつめている。石敷は、東側が未舗

装の参道SF02に面し、前回の調査同様に河原石を見切石として、石敷の南縁に連なることがあきらかとなった。しかし、SX661とSD662は東西にのびて、未舗装の参道を南で区切るようになっており、SF02が南北約18mの規模でおわることが確認できた。

南調査区では、石敷遺構の南約15mの位置に、暗渠1条を検出した。瓦製土管を東西方向に4.2mにわたって13本つなぎあわせたものである。瓦製土管は行基葺丸瓦と同じ製作技法で作られている。この暗渠は調査区内での高低差はほとんどないが、瓦製土管の連結方式からみると、水は付近の自然地形とは逆に西から東へ流れていたものと考えられる。この暗渠の構築時期は、瓦製土管の形状・製作技法からみて、7世紀後半頃と考えられる。

今回の調査の結果、「石敷広場」と称されてきた石敷遺構は、飛鳥寺の伽藍中軸線に対して7～8°の振れをもつ幅約20.5mの道路状遺構と考えることができよう。また、飛鳥寺南門から南へのびる参道も、舗装・未舗装あわせて45mの規模となり、石敷遺構の南縁までのびることが確認できたことにより、飛鳥寺の南限もここにもとめることができよう。また、今回の調査で新たに、飛鳥寺の南限以南に暗渠が検出されたことは、飛鳥寺寺域外の土地利用がいかになされていたか、という問題を考えるうえでも貴重な手がかりになると言えよう。(立木 修)